ITP-EUROPA 派遣報告書

博士後期課程　横田さやか

派遣期間　平成 23 年 9 月 18 日～平成 24 年 9 月 2 日

派遣先　ボローニャ大学（イタリア）

指導教員　和田忠彦教授

受入教員　エレーナ・チェルヴェッラーティ教授
(Elena Cervellati)

研究テーマ　イタリア未来派の舞踊

研究内容

1909 年の創立宣言によって生まれたイタリアの前衛芸術運動である未来派が創作した舞踊を研究の対象としている。とりわけ、Aerodanza「航空ダンス」(1931 年)を踊ったバレリーナ、ジャンニーナ・チェンシ(Giannina Censi 1913-1995)に注目し、その作品を通じてモダン・ダンスの歴史に於ける未来派ダンスの位置付けと重要性を考察する。

派遣期間中の研究成果

昨年度に引き続き、ボローニャ大学博士課程映画・音楽・演劇専攻に在籍し、舞踊史を専門とされているチェルヴェッラーティ教授に師事した。演劇専攻のセミナーに定期的に出席し知識を深め、研究分野に関わりのあるシンポジウム等にも積極的に参加した。とりわけ、共通の関心をもつ若い舞踊研究者との交流の機会として有意義であったのは、舞踊研究会(Danza e ricerca)に参加したことである。この研究会では、イタリア国内でのダンス・スタディーズの基盤を

築かれた元ボローニャ大学教授、エウジェニア・カジーニ・ローパ(Eugenia Casini Ropa)教授が中心となり、大学公認オンライン学術誌 Danza e ricerca『ダンスと研究』の発行を進めている。この研究会を通じてカジーニ・ローパ教授からも論文計画についてご指導をいただけたことは、このうえない励ましとなった。

文献資料、また音声、映像資料の調査は昨年度をもってひと通り済ませていたが、ジャンニーナ・チェンシに関する貴重な資料を所有するトレント・ロヴェレート近現代美術館のアーカイヴでは、今年も資料の再検討を含め、いくつかの重要な作業を遂行した。

研究の成果としては、まず、『和田忠彦先生還暦記念論文集 *Per i sessant'anni del professor Tadahiko Wada*』に未来派の時代区分についての問題を扱った論文 *Il "secondo" futurismo: il problema della periodizzazione ed i suoi studi*(「'第二次'未来派——時代区分の問題とその研究について」)を寄稿した。報告者の博士論文では「第二次」と呼ばれた世代の概念や作品と「第一次」のそれが平等に考察されるため、前世紀の未来派研究へのアンチテーゼとなりうる。そこで、本研究論文では、未来派の作品が政治思想による偏見から解放されることで、「第二次」の活動についても詳細な資料研究が実現された結果、かれらの作品の意義と重要性が徐々に認められるに至るまでのイタリア国内における未来派批評史の変遷をまとめた。また、先に挙げた学術誌 Danza e ricerca へ投稿予定の論文、*Danza aerea futurista*(「未来派航空ダンス」)も脱稿した。本論文では、ダイナミックなアクロバット飛行と空中で体感する興奮を踊りに表現したチェンシのダンスを、トゥ・シューズを履き重力に逆らい軽やかな飛翔を表現してきた一連のロマンティック・バレエのコンテクストに位置付け考察することを試みた。この内容は博士論文の核となる重要な展開部に該当する。一方で、今年度は研究発表を行う機会は得られなかったが、2012 年 11 月に開催予定の ITP-EUROPA 国際セミナーにおいて研究発表をさせていただくことが決まり、その発表原稿の執筆を済ませた。*Il corpo danzante della danza futurista, dell'Ausdruckstanz e del Butoh*(「アヴァンギャルドの踊る身体——未来派ダンス、表現主義ダンス、舞踏」)と題し、一般的には概念的にも地理的、年代的にも共通の文脈で解説されることのないこれらの異なる三つのダンスの形式、または概念から、同時代と未来に発生する未来派的踊る身体の帰納的定義を試みた。つまり、20 世紀初頭にみられる新しいダンスの両極的な潮流、言

い換えれば、対照的な踊る身体――機械を模倣する身体と自然に調和する身体――を比較し、それがそれぞれのダンサーの内部でまたその振付けの過程で反発しあいながらも交錯するさまを明らかにし、その先に現れる 20 世紀後半の日本の前衛舞踏へと論を進める。この発表内容は、報告者の博士論文のひとつの特徴となる論運びを短く要約したものといえる。同時に、未発表論文となるが、本研究発表内容を基に、より詳細に論じたものも研究論文として執筆を終えた。

以上の研究活動と成果発表のための取り組みに平行し、今年度より本格的に博士論文の執筆作業に着手した。６月には、ボローニャ大学における演劇専攻の博士課程在籍者を対象とした博士論文の進捗状況報告会が設けられ、報告者は、博論の目次、章、節ごとの内容の要約、引用または参照する資料のメモ、そして序章の下書きと、文献表を提出した。あらかじめボローニャ大学、東京外国語大学の両指導教員にご指導を仰ぎ、章構成の下書きを改善し報告会に臨んだ。報告会では、無事に審査を通過し、他の教授からも期待の言葉をかけていただけたことは、いよいよ執筆作業に本腰を入れるにあたって強い励ましとなった。

最後に、歴史あるボローニャ大学において充実した研究生活を送れるよう支えてくださった東京外国語大学指導教員和田忠彦教授、ボローニャ大学指導教員エレーナ・チェルヴェッラーティ教授をはじめ、ITP-EUROPA 関係者のみなさまに、この場をお借りして改めて感謝の意を記したい。ありがとうございました。